

連載コラム

みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第13回

イネ科の植物のいろいろ

(初夏から盛夏まで)



本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫

(13) イネ科の植物のいろいろ

(初夏から盛夏まで)

5月に入ると、それまで控え目に生長していたイネ科の野生植物がぐんぐん伸びてきます。どことって取り柄のなさそうなイネ科植物は、野草というより雑草とよばれることが多いようです。メヒシバやスズメノカタビラなど、イネ科雑草が庭や家庭菜園にはびこって、除草に苦勞している人も多いのではないのでしょうか。

イネ科植物の花は風媒花ですから、授粉のために虫を呼ぶ必要はありません。したがって、美しい花を咲かせることもなく、人にも無視されがちです。その上、長い花穂をつくり大量の花粉を風でまき散らすので、花粉アレルギーを起こさせるものも少なくありません。

こう書くと、イネ科の野草に対する印象はあまり良くないものになってしまいます。しかし見方を変えると、それらは、人類にとってきわめて重要なイネ科の作物と多かれ少なかれ類縁のある植物たちです。われわれの古い祖先は雑多なイネ科雑草の中から、食糧や家畜の飼料となる種を選び出し、改良・育成してきたのです。イネ科植物は砂糖（サトウキビ）やアルコール（コメ、オオムギ）の主な原料でもあります。イネ科植物がもしこの世になければ、多くの人類の食生活はいかに乏しいものであるか想像できます。

そんなことを考えると、イネ科の雑草にも多少親しみがわくのではないのでしょうか。一見、どれもよく似ていると思われがちですが、よく見るとそれぞれに個性があります。

みずき野周辺で、私が見たイネ科植物は、一年を通じ約60種ありました（タケとササを除く）。その約3分の2は初夏から盛夏に出穂し、花を咲かせます。

すべてを網羅することはできませんので、ここでは、それらの中から、もっともよく目にするものと、何らかの特徴のあるもの数種を選んで、それぞれについて述べることにしました。

(1) カモジグサとアオカモジグサ

カモジグサもアオカモジグサも路傍や空地に群生する草丈80センチ前後の在来
の多年草です。

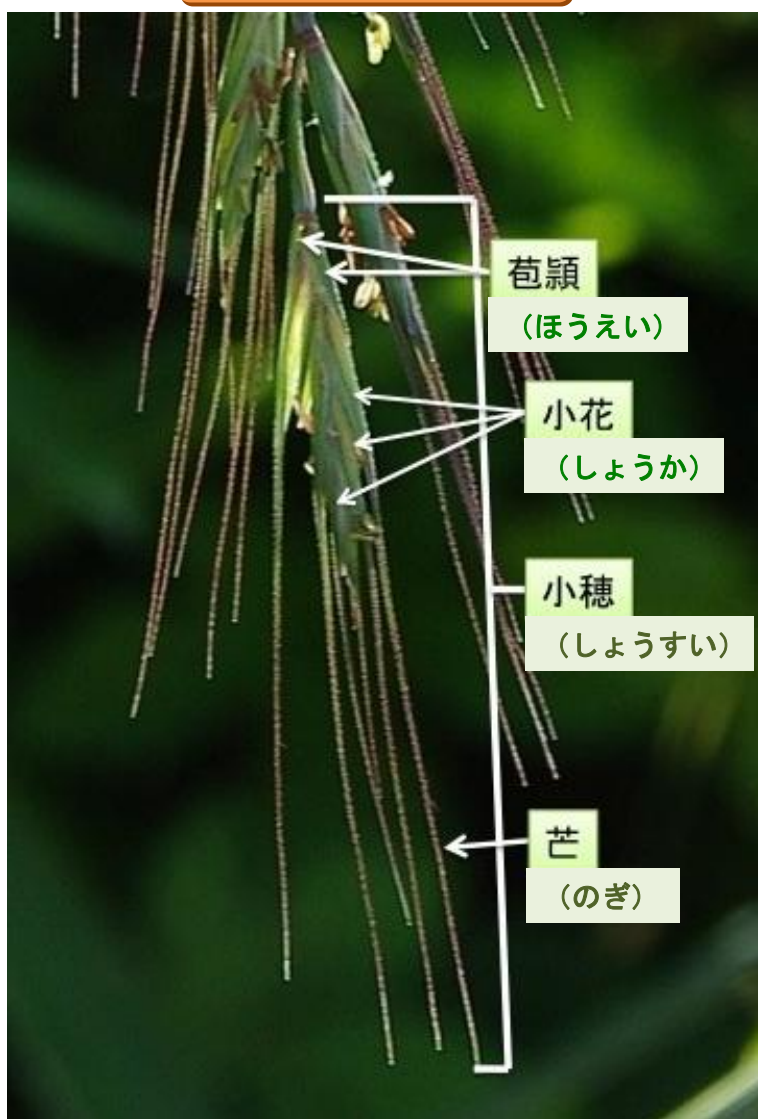


カモジグサ 6月上旬 本町地区



アオカモジグサ 6月上旬 本町地区

カモジグサの花の構成



両種はよく似た植物ですが、それらの違いを述べる前に、イネ科植物の花について、カモジグサを例に、簡単に説明しておきましょう。

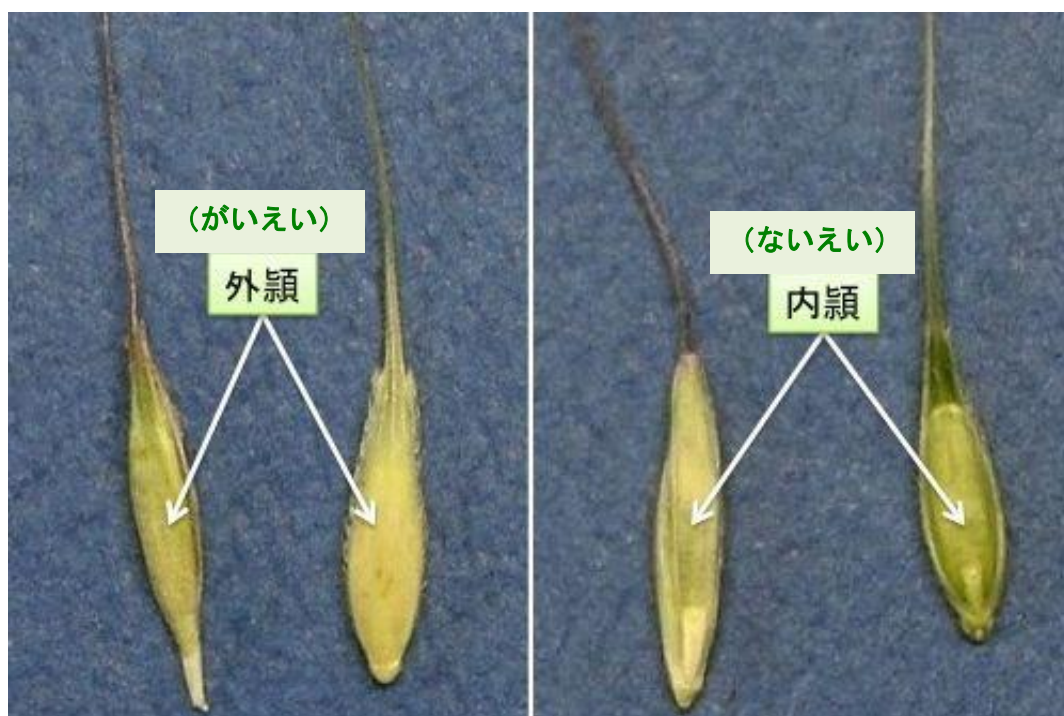
イネ科の花は通常われわれがイメージする花と少し違います。イネ科植物では、稈（かん、イネ科植物の茎のこと）の一番先端についている葉（止め葉）の上に穂が現れます。穂は枝分かれすることもあり、その主軸や枝には、花の塊（かたまり）がたくさん付いています。この花の塊を「小穂（しょうすい）」といいます。小穂の基部には通常2枚の「苞穎（ほうえい）」がついています。苞穎の上（カモジグサの写真では下）には、花が順序よく並んでいます。イネ科ではとくに、この一つ一つの

花を「小花（しょうか）」とよびます。小花にはがくや花弁はなく、雌しべと雄しべは、「外穎（がいえい）」と「内穎（ないえい）」に包まれています。小花の外側に見えるのは外穎です。内穎は小花をつまみとって裏側を見れば分かります。苞穎も外穎も内穎も葉の変形したものと考えられています。カモジグサやかなり多くのイネ科植物では外穎の先端に「芒（のぎ）」という針状の突起が付随しています。

カモジグサとアオカモジグサに話を戻します。カモジグサの小穂は緑灰色で多少紫がかかったものが多く、アオカモジグサの小穂は明るい緑色です。また、カモジグサの穂は深く垂れ下がりますが、アオカモジグサの穂は湾曲する程度で、深く垂れ下がることはありません。でも、正確に両者を識別するには、小花を取出して、違いをみることです。

カモジグサと アオカモジグサの 小花の比較

左図：小花の外側
右図：小花の内側
どちらの図も、
左：カモジグサ
右：アオカモジグサ



カモジグサでは外穎の先端に芒がついていますが、アオカモジグサでは外穎の先端の2つの爪状の突起の間から芒が伸びています。小花の裏側を見ると、カモジグサの内穎は外穎と同じ長さ、アオカモジグサの内穎は外穎より短いというはっきりした特徴があります。

カモジグサは漢字で「髭草」と書きます。小穂を日本髪を結うときに使う髭（かもし）のかたちになぞらえたものと思われます。

(2) イヌムギとヤクナガイヌムギ

5 / 12

イヌムギもごく普通に路傍や空地に群生する草丈1メートル前後の植物で、明治年間に渡来した南米原産の多年草です。小花は扁平で無毛、外穎はごく短い芒がついています。葯（やく、おしべの先端についている花粉の袋）が極めて小さく、花は開かず（閉鎖花）、自家受粉で種子を作ります。

ヤクナガイヌムギは最近増えてきた植物で、北米西部原産の多年草です。草丈はイヌムギよりやや短いけれど、外観はそっくりです。ただし、その名のとおり、葯が長く、開花して小花の外に現れます。



イヌムギ 5月下旬 本町地区



ヤクナガイヌムギ 5月中旬 本町地区

(3) 野生化した牧草たち

牧草から野生化したいくつかのイネ科植物がみずき野周辺に見られます。



ハルガヤ 5月中旬 第2調整池

ハルガヤは、草丈50センチ内外の比較的小さな牧草で、ヨーロッパ原産の多年草です。成熟前のハルガヤには香りのないある物質が含まれていますが、穂が熟するとその物質が分解してクマリンという物質に変わります。クマリンには強く甘い芳香があり、この香りがすると、そばに成熟したハルガヤが生えていることが分かるほどです。第2調整池附近によく見かけます。牧草名はスイートバーナルグラス。

カモガヤは、地中海～西アジアに原産する草丈１メートル内外の多年草で、優れた牧草ですが、花粉は花粉症を引き起こす代表格でもあります。第２調整池附近に群生しています。牧草名はオーチャードグラス。



カモガヤ 5月中旬 第2調整池



ネズミムギはヨーロッパ原産の80センチ内外の越年草です。ごく普通の植物で、第２調整池附近をはじめ、至る所に見られます。牧草名はイタリアンライグラス。

ネズミムギ 5月中旬 第2調整池

ホソムギは上記ネズミムギによく似た植物ですが、ネズミムギが越年草なのに対して、ホソムギは多年草です。ヨーロッパ原産。ネズミムギの小花には芒がありますが、ホソムギには通常芒がありません。小穂の中の小花はネズミムギでは10以上、ホソムギでは10以下のものが多いようです。ホソムギの牧草名はペレニアルライグラス。



ホソムギ 6月下旬 第2調整池

なお、ネズミムギとホソムギは近縁種で両種の間によく自然交雑が起こり、中間型が出現します。近頃は、これらの中間型が増えているように思います。

上記4種のほか、写真は載せておりませんが、ヨーロッパ原産のオニウシノケグサ（牧草名：トールフェスク）もごく普通に見られます。オニウシノケグサは西洋芝としても利用されます。

（４）カズノコグサ



水田や湿地にごく普通の越年草（または1年草）で、日本原産と考えられますが、ユーラシア大陸や北米にも分布しています。小穂に並ぶ小花の様子はたしかにカズノコを連想させます。

カズノコグサ
5月中旬
貝塚地区

（５）ヒエの仲間

下に述べるイヌビエの仲間は、穀物の一つ、ヒエの祖先種と考えられています。ヒエは今では健康食品として売られている程度で、食べる人は少ないと思いますが、古来、救荒作物として重要な役割を果たしてきました。また、ヒエといえば宮崎県椎葉村の民謡、『庭のさんしゅうの木 鳴る鈴かけて・・・』と歌い出す『ひえつき節』を思い出します。

イヌビエ

水田や湿地にごく普通の在来の1年草です。草丈は50～80センチ。



イヌビエ 7月中旬 貝塚地区



ケイヌビエ

イヌビエの一つの型で、イヌビエより大きく、1メートル前後になります。イヌビエも短い芒をもっていますが、ケイヌビエの芒は3〜4センチの長い芒をもっています。

ケイヌビエ 7月下旬 貝塚地区

そのほかに、やはりイヌビエの一つの型でタイヌビエもよく見られます。大きさはケイヌビエに近いのですが、芒はごく短いか、無芒です。

(6) チゴザサ

チゴザサは、草丈50センチ内外の在来の多年草で、みずき野周辺の田のへりや湿地に見られます。イネ科の植物の花は一般に花としての魅力は少ないですが、チゴザサの花はきれいで可愛らしく、一見に値します。ピンクに色づいているのは、穎から露出した雌しべです。



チゴザサの小花

7月下旬 本町地区



チゴザサはこんな感じの植物です

7月下旬 本町地区

(7) チガヤ

日本全土にごく普通の植物で、草丈50センチ内外の在来の多年草です。小穂の基部に長さ12ミリほどの光沢のある白い毛が密集してついており、のちに種子の飛散に役立ちます。



チガヤ 4月下旬 第2調整池

チガヤは、「チ」ともいい、漢字では「茅」と書きます。「浅茅（あさち）」ともよばれ、万葉集以来、古典文学の中にもよく出てくる名称です。

また、チガヤの花穂をツバナといいます。ツバナは万葉の時代から今の時代までずっと使われている名称です。子どもの頃、父に教えられて、春、チガヤの茎を開いて、まだ外に出ていないツバナを口に入れて噛んだことがあります。うす甘い味でした。

万葉集にちょっとおもしろい相聞歌があります。
紀女郎（きののいらつめ）が大伴家持に送った歌。

戯奴（わけ）がため わが手もすまに

春の野に 抜ける茅花（つばな）ぞ

食（め）して肥えませ

紀女郎 万葉集（1460）

（あなたのために春の野に出て手も休めずに抜いたつばなです。
どうぞ食べて太ってくださいな）

これに対して家持からの歌。

わが君に 戯奴は恋ふらし 賜（たば）りたる

茅花を食（は）めど いや瘦せに瘦す

大伴家持 万葉集（1462）

（私、貴女を恋しているらしいのですよ。戴いたつばなを食べても
痩せるばかり）



チガヤは荒れた土地、手入れの行き届かない庭にはびこる草です。チガヤがそのように生えている場所を浅茅生（あさちう、あさちふ）とよび、荒れ果てた土地を表現します。浅茅が原も同様の意味で使われます。

源氏物語の「桐壺」の巻には、帝が寵愛した桐壺更衣が亡くなったあと、桐壺の母が、帝から遣わされた鞆負の命婦（ゆげひのみょうぶ）の訪問を受け、

「鈴虫の 聲のかぎりを 盡（つく）しても
ながき夜（よ）あかず ふる涙かな」

という命婦の歌に対し、

「いとどしく 蟲の音（ね）しげき 浅茅生に
露おきそふる 雲の上人」

と返します。蟲の聲は桐壺の母の嘆きの聲であり、露は涙の表現です。

時代は下りますが、上田秋成の「雨月物語」の「浅茅が宿」には浅茅が原の寂しく凄まじく情景が表されています。

下総の国真間の里（市川市真間）に住む勝四郎という男は農業を嫌って、祖先から受継いだ田畑を売った金で絹を買い、妻の宮木（みやぎ）の反対を押し切って、京に出て絹を高値で売り、金儲けをするが、道中、盗賊に金品を残りなく奪われ、関東は戦乱のため関を通ることができず、上方に引き返します。近江や京で過すうち、7年経ってふと妻が恋しくなり、戦火に荒れ果て、人気のない真間に帰ります。勝四郎は浅茅の生い茂る場所に一軒家を見つけます。そこに妻の宮木が夫の帰りを待っていました。愛する妻とともに寝て、明け方目ざめた勝四郎がみたものは……。久し振りに一夜をともに過した妻は、もはやこの世の人ではありませんでした。

暗い話になりましたが、チガヤは一方では陽気で明るい植物でもあります。ことに5月下旬から6月上旬、実が成熟して、綿毛が飛び始める頃のチガヤの美しさは格別です。

最後に、金子みすゞの童謡「つばな」を載せておきましょう。

つばな

つゝばな、つばな
白い、白いつばな。

夕日の土手で、
つばなを抜けば、
ぬいちゃいやいや、
かぶりをふるよ。

つゝばな、つばな
白い、白いつばな。

日ぐれの風に、
飛ばそよ、飛ばそ、
日ぐれの空の、
白い雲になあれ。

風に揺れるツバナの穂
6月上旬 第2調整池



2015 年 5 月
本吉 総男